

資料としての掲載のため、
以下の箇所等を省いております。
個人情報(氏名・住所・電話番号)
あいさつ・祝辞・寄稿・公募作文
(P1～7, 51, 52, 54～69)

公共施設

つつじが丘 ふれあいセンター

『福祉・文化』の拠点として学習、保育、休養、集会のために使用されます。災害時緊急避難所指定。

当自治会内の管理運営委員会により運営されています。

(市と防衛庁の補助金により建設され、自治会に管理を委託)



平成16年度までの改修により全館バリアフリーになりました。

料理教室も可能な厨房施設があります。



統一自治会総会や、いこいのつつじ、各種サークルに利用されています。



利用方法 申込書と使用料を管理人に提出し申し込む。

使用時間 午前9時～午後9時

使用料

施設名	2 時間	4 時間	1 日
集会室(ホール)	1,000 円	2,000 円	3,000 円
学習室(机、椅子付き)	1,000 円	1,500 円	2,000 円
休養室(12 畳和室)	1,000 円	1,500 円	2,000 円
保育室(12 畳和室)	1,000 円	1,500 円	2,000 円
全館(葬儀等)			30,000 円

公共施設 公園

八木山公園(1丁目)

八木山登山口のすぐ南の位置しています。
東西に長い公園です。



大小7箇所の公園があります。

公園維持管理は市都市計画部公園課との契約により『月2回以上の清掃と年2回以上の除草』を各単位自治会が行っています。(市より報奨金が支給されています。)

八木山・北・西・南・つつじが丘公園には防火水槽が埋め込まれています。

北公園(3丁目)

防火用水の石碑があります。



決まりを守って、皆が気持ちよく使えるようにしましょう！



東公園(5丁目) 石垣の上にある少し小高い公園です。



つつじが丘公園：遊歩道が整備され住民の散歩コースとして利用されています。

西広場(上池公園) 反対側には広いグラウンドがあり
ゲートボール場も取れます。

東広場(中央公園) 恒例の盆踊りの会場になります。



南公園(8丁目)

広々としたグラウンドで子どもたちが集い楽しんでいます。



西公園(6丁目)

藤棚が心地よい日陰を作っています。

公共施設

鵜沼地区体育館

各務原市の施設です。

体育館管理人への申込により、各務原市内団体はもちろん市外の団体でも代表者が市民であれば、使用できます。

使用時間 9:00～21:00

休館日 12月28日～1月4日

使用料 無料



連日各種サークルでにぎわっています。



バドミントン・卓球・バレーボール・体操・剣道など、施設に負担のかからないスポーツが行えます。

更衣室奥には、会議室が有り、20人ほど入室ができます。(椅子・机・黒板あり)



トイレはもちろん、ロッカー室、シャワー室が完備



防災訓練時には炊き出し実習の会場に

災害時緊急避難場所です。

公共施設

八木山小学校

校区はつつじが丘・松が丘及び羽場町の一部です。

つつじが丘の災害時の緊急避難所です。

八木山夏祭り・健康ウォーク・新春の集いなど町づくり協議会の行事の会場になります。

また体育館・グラウンドは、学校を窓口として各サークルも使用できます。



正面玄関：季節の花で飾られています。

また、校内には50種類以上の木々が植わっています。



卒業生の作った記念像



足元には皆の手形が押してあります。台座に名前が刻まれています。

**つつじが丘統一自治会・
松が丘連合自治会からの
寄贈碑**

碑の裏側にはめだかのいる小さな池があります。



体育館

校区の選挙会場として使われます。
バスケットコートが1面取れます。



鶴沼の歴史（ふるさとのルーツ）

織物は縦糸と横糸によって織られています。考えてみると我々人間存在も亦、歴史（時間）という縦糸と地理（空間）という横糸により織り成されているように思われます。私達は今、岐阜県各務原という空間に住んでいると同時に、過去から現在、現在から未来へと続く歴史の中に立っております。縁あってこのつつじが丘に住む以上、この地の歴史を知ることによって郷土愛を深め、人生を豊かにすることが一つの喜びだろうと思われます。その意味で郷土史の一端を知って戴きたいと、ここに小文を掲載することにしました。

古代：壬申の乱と鶴沼

古代史の中の主な出来事として壬申の乱が挙げられますが、実はこの壬申の乱に活躍した人物が鶴沼出身の豪族 ^{むらくにのおより}村国男依です。村国男依は現在おがせ池から西北へ車で3分、子供歌舞伎で有名な村国座が境内にある村国神社に祭られています。

壬申の乱は西暦672年（飛鳥時代）天智天皇の子 大友皇子 と 天皇の弟 ^{おおあまの}大海人皇子が皇位継承をめぐって起こした内乱です。吉野に隠棲していた大海人皇子は天智天皇の死後、近江朝廷（大友皇子）が天智天皇の山陵を造営するという名目で美濃尾張から人夫を集め武装させるにいたり、之に対抗、美濃の村国男依と身毛君広、そして和珥部臣君手の三名を美濃国味蜂間評の湯沐邑に送り、国司と連絡して不破の関を封鎖するよう手配しました。村国の男依は軍勢三千を集め不破の関を封鎖、ここで大海人皇子は、不破の関を拠点に東海道東山道沿いから兵力の動員を図った上、伊勢方面と近江方面の二手に分かれ、大津京に向かわせましたが、近江方面を担当した村国男依らの率いる軍は大友皇子の本営がある大瀬田で決戦を繰り広げ大津京を陥落させました。大友皇子はわずかな舎人^{とねり}を従え長等山の山崎において最期を遂げて、近江朝廷は滅亡しました。大海人皇子は翌年即位して天武天皇となり、以後律令制による国家体制が導入され天皇への権力集中が行われることになりました。戦功のあった男依と男依一党は朝廷から高い位階を与えられ、更に税金を免除される等、厚遇を受けて、この後も勢威をふるうことになりました。

中世：

（1）承久の乱

源氏による鎌倉幕府は頼朝の死後三代で滅び北条氏が実権を握っていましたが、後鳥羽上皇は源氏の系統断絶を好機として朝廷の権威を回復しようとして1221年北条義時追討の院宣を下しました。これが承久の乱の起こりです。この戦いで美濃は院の分国であり、上皇方の第一線となり、その軍勢の中心に多くの武士が参加しました。上皇方は17,000余騎で木曾川の大井戸の渡し（可児町土田）から州俣にかけて九つの渡しを固め、これに対し幕府方は北条泰時 時房を大将として19万の大軍で攻め登りました。上皇方の九つの渡しの主力は摩免戸（各務原市前渡）でした。戦いは6月5日夜大井戸の渡しから始まりましたが、十倍余の幕府軍に上皇方はみじめに敗れて京都へ退き、乱後、後鳥羽、土御門、順徳の三上皇は遠国へ島流しとなり上皇方についた人々の知行する所領はすべて没収されました。この戦いで美濃の武士は多くの戦死者を出しましたが、いま、前渡の不動山の山腹に

はこの乱の戦死者を弔う多くの墓が五輪の塔の姿で苔むしたまま残っています。この乱以後、朝幕間の力関係は武家側に大きく傾き一世紀の間、動きませんでした。

(2) 土岐氏の活躍

鎌倉時代初期清和源氏の流れを汲む土岐一族は東濃の一名族に過ぎませんでした。初代土岐頼貞は元弘の変(1331)の後、足利尊氏の武将として、その地位を確立、美濃国の守護となりました。二代頼遠は父祖の地である土岐盆地から始めて美濃平野の長森城へ進出、建武中興の後、後醍醐天皇が吉野に移られてからも足利方として岐阜長森城により美濃を治めました。三代頼康は美濃尾張伊勢三国の守護とまでなりました。その後、頼康の子、康行は將軍義満により謀反の心ありとして討たれましたが、土岐頼益がよく土岐家の再興を図り、赤松、一色等と並んで幕府七頭の一つに列したほどの強力な守護大名になりました。この頃、土岐氏の勢力を背景に創建された禅寺、寺院が多いのですが、つつじが丘に近い大安寺も室町初期応永二年(1395)に土岐美濃の守 頼益公を開基笑堂常訴を開山として建立されています。大安寺境内には頼益公の墓が建てられておりますが、土岐氏の重臣で且つ守護代もあり、大安寺と関係の深かった斎藤利永の墓も並んでおかれており、これら二基の墓は岐阜県史蹟に指定されています。因みにその頃、幕府の官寺で諸山の格式を持っていた承国寺(鶴沼古市場)の創建も土岐頼益の子、持益(守護)によるものです。

(3) 五山文学の中心となった鶴沼

応仁元年(1467)室町幕府の管領畠山、斯波両家の後継問題に端を発した争いに細川氏と山名氏の勢力争いが絡み、天下を二分する大乱となり、東軍16万人、西軍11万人が11年にわたって京都を中心に戦ったのが応仁の乱です。京都の町は焦土と化し、当代一流の禅僧公郷文化人たちが難を逃れて地方へ移住、画僧雪舟が大内氏を頼り山口へと移りましたが、横川景三 万里集九は鶴沼へ移り住みました。そのために鶴沼が五山文学の中心地として栄えることとなりました。五山文学とは五山に京都五山、鎌倉五山とありますが、それら五山を中心とした禅僧によって行われた漢文学、禅宗の法語、偈、詩文、論説、日記、随筆等のことを言います。万里集九は近江国安曇郡に生まれ幼くして東福寺の禅童、続いて相国寺の僧侶となりましたが、漢詩に秀で当時京で彼に肩を並べるものはいないと云われた程でした。応仁の乱による難を避け近江へ逃れ、土岐氏を頼り鶴沼に来住した後、鶴沼東福祉センター境内にある北野天神の付近に草庵「梅花無尽蔵」を営み、この地に没するまで35年(1475～1507年頃)の長きにわたり(途中江戸城の太田道灌に招かれ東海道を下り一次鶴沼を離れております。)当地を中心に五山文学を広め文化活動を進めております。土岐氏ゆかりの大安寺、承国寺、岐阜市加納の正法寺等が活躍の場所でしたが、木曽川を利用して一宮の妙興寺、八百津の天寧寺にも足を伸ばしております。又、集九はこの地で51才のとき還俗し結婚、二児をもうけ幸せな時期も過ごしましたが長男千里を9才の若さで死なせ悲嘆にくれたこともあります。千里の墓は大安寺の西ケ墓に葬られています。

近世：

(1) 信長の中濃作戦

武功夜話によると信長が尾張北部の制定を終え、犬山城攻略を目指したのは永禄8年

(1565) のことでした。犬山城主織田信清は美濃の斎藤龍興、鵜沼城の大沢治郎左衛門、伊木山城の伊木清兵衛らとともに信長に対抗しましたので信長は秀吉に命じ伊木山城、鵜沼城を攻撃させました。秀吉は鵜沼羽場（巾上）に本陣を構え鵜沼城に対峙する一方、伊木清兵衛と面識のあった川並衆の蜂須賀前野らに命じ伊木山城の開城を交渉させ成功させました。続いて、鵜沼城の大沢治郎左衛門とも会談降参をすすめました。信長は犬山城を陥した後、猿啄城に向かいこれを攻略、ついで鵜沼城も降伏、かくて鵜沼という地は信長の全国制覇の夢を大きく前進させた記念すべき場所となりました。

(2) 中山道の開設

鵜沼は古代から交通の要衝として栄えた土地柄です。鵜沼の古墳群、坊の塚古墳、衣掌塚古墳、一輪山古墳（いずれも羽場）、金縄塚古墳（東町）1500年前の古墳時代前期に強大な勢力の豪族がいたことを表しており、これらの古墳が古代の大和とこの地を結ぶ東山道沿いに存在していること、木曽川をはさんで、美濃と尾張を結ぶ渡河地点であることから、大和政権にとって東国を支配するための拠点であったことが考えられます。鎌倉時代にも東山道各務駅や、宇留間市の立ったところ人と物の集産地でありました。降って、慶長5年(1600)関が原の戦いに勝利をおさめた徳川家康は慶長7年全国に五街道を設定しましたが、その中の重要街道として中山道が設けられ京都と江戸を結ぶことになりました。鵜沼宿は江戸から53番目の宿場としておかれ、桜井家が本陣、野口家と坂井家が交替で脇本陣を勤め、旅籠の数は25軒とされ、かなりの繁栄を示していたと考えられます。参勤交替で中山道を利用した主な大名は、彦根藩大垣藩丸岡藩郡上八幡藩加賀藩等々の30家でありましたが、加賀の前田侯は裕福であったので、家臣の礼儀もよかった、彦根藩は井伊さんが桜田門外の変の2年前に通られたけれどなかなかの節約家だったとの話が残っています。

芭蕉も江戸時代中期前後3回も鵜沼を訪れておりますが、当時を偲び西町の一角に句碑が建っております。1回は貞享2年(1685)3月大垣を経て鵜沼へ坂井邸に一泊して大針に吟行、翌日木曽川經由桑名熱田をへて江戸へ、(野ざらし紀行)2回目は貞享5年7月岐阜で鵜飼見物の後、坂井邸へ一泊、翌日は鳴海、名古屋へ、3回目は同年8月名古屋から来鵜、坂井邸に二泊、その後、木曽路へと更科紀行に旅立ちました。芭蕉の句「送られつ送りつ果ては木曽の秋」はその時の作です。

(3) 幕末

幕末の頃、中山道鵜沼宿を通過した人達で歴史に残って有名な人々は1862年公武合体論の犠牲となって徳川家に御降嫁になった皇女和宮一行と、1864年水戸の天狗党一行が尊皇攘夷の意志を徳川慶喜に訴えるために鵜沼を通過京都へ向かったことの2件が挙げられます。他には勤王の志士吉田松陰も江戸へ向かう途中、鵜沼宿を通行しております。皇女和宮は仁孝天皇の第八皇女として生まれ、孝明天皇の妹に当たりますが、幕末ペリー来航以来の世の中が騒然となっていた頃公武合体論のため政略結婚を強いられ第14代将軍徳川家茂に嫁ぐため、中山道を江戸へ下られました。反対派の志士達が和宮の奪還を図るといわれたこともあって、警備は厳重を極め、供には岩倉具視ら貴族、女官ほか警護の武士、人足らで数千人にも及び一つの宿場を通過するには四日を要したところもあったそうです。道中

和宮はその寂しさを次のように歌っています。「住み慣れし、都路出でて、けふいく日、いそぐもつらき、東路の旅」

江戸では家茂との仲むつまじい生活が続きましたが、まもなく家茂は第二次長州征伐のため出陣して大阪に赴くことになり別居となりますが家茂は妻を慰めるため西陣の織物を江戸に贈ったりします。しかしながら、やがて病死することになります。和子はこれに対し又歌を残しております。「空蟬の唐織りごろも、なにかせむ、綾も錦も、君ありてこそ」

元治元年(1864)水戸藩の尊攘派による筑波山挙兵とそれを契機として起こった争乱を天狗党の乱といいます。彼らは尊皇攘夷の目的を達成するためやむなく幕府軍と対戦した事情を京都の徳川慶喜に訴えるため、武田耕雲斎を総大将、田丸、藤田を副将とし

千人余の部隊を編成し京都へ向け西上を開始しました。西上軍は幕府軍や諸藩の追撃を避けながら真冬の中山道を通り元治元年10月末鶴沼宿へ入りました。ついで雪の根尾谷、温見峠の難所を越え越前に入ったところで徳川慶喜の攻撃を受けることを聞いて降伏し、加賀藩に投降、斬罪追放の刑に処せられました。

近代・現代：

鶴沼の近代・現代となると事件が多すぎるので詳細は紙面が許しません。項目程度の記述とします。まず、尾張藩家老田宮如雲が武士の失業救済のため各務野を開墾する話があります。鶴沼大安寺洞に溜池を築き各務野まで用水路を引く工事を始めたのが明治4年でしたが水路は完成したものの漏水がひどく事業は失敗しました。ただ、溜池（新池）の水だけは今も周辺の水田を潤しております。

明治御一新になり多くの住民は自分たちの土地が肥沃でないので税が安くなるのを期待しましたが江戸時代とあまり変わりませんでした。五箇条の御誓文、版籍奉還、廃藩置県、学制、徴兵制、地租改正令と矢継ぎ早に改革が行われました。江戸時代は中山道鶴沼宿として生きてきましたが、この機能に頼れず農業で生きることを強いられることとなります。

明治24年鶴沼は濃尾大地震に見舞われ大被害を蒙りました。住家869戸の内、全壊431戸、半壊437戸死者20人他の崩壊13、住民は余震を恐れ竹藪で暮らしたともいいます。この頃、日清、日露の戦争があり、国は富国強兵の政策を進めておりました。

少し遡りますが、明治9年既に鶴沼の土地の一部が陸軍に割譲されており、陸軍はここを大砲の射撃場に使っておりました。後に手狭となり、一時、騎兵、工兵の演習場に使われていましたが、大正6年飛行場として使われることとなり土地の拡張が図られまして、地元も鶴沼の発展につながるとして協力しました。飛行場ができることにより、大正8年には高山線が起工され、各務原鉄道も昭和2年に開通、大正12年には川崎が進出、機体の組立を始めました。後昭和12年には航空機工場を大拡張、神戸から1200名の従業員が移住、那加蘇原にはそれらの社宅群が建ち並ぶこととなります。

この頃から、戦時色がますます強くなり、節約、配給、出征、学徒動員、学童疎開、女子挺身隊、竹槍訓練等、戦時下の生活が始まります。そのうち太平洋戦争がはじまり、終戦の20年には基地、軍需工場があったため、6/22、6/26と二度にわたりB29の大空襲を蒙り、潰滅的な打撃を受けます。

戦後の鵜沼

戦後の食料難、復員引揚げ、米軍の進駐等と困難な時代がありましたが、廃墟の中から不死鳥の如く、立ち上がることができました。所得倍増、列島改造の波に乗り、40年代後半から住宅団地の開発が急テンポで行われ、鵜沼もごたぶんに漏れず小林住宅、名鉄団地、新鵜沼台、つつじが丘、松が丘等の大団地が造成され、住宅ブームに湧いた時代がありました。このことは鵜沼の地が自然の景観に恵まれ、交通の要所であったことによるものであり、昔から地の利を得ていたことが偲ばれます。

この間、行政の形としては昭和18年に鵜沼村から鵜沼町へ、昭和30年には各務村を合併して新鵜沼町へ、昭和38年には那加、蘇原、稲葉の三町と合併、各務原市として成長を遂げました。平成16年には川島町を合併、新しい各務原市となっております。

今後の各務原並びに鵜沼の発展は、東海環状自動車道や新木曽川架橋により“東海の時代が到来”の波に乗り、交通の要衝であり優れた自然環境の良さを基盤に産業、文化、観光の面で個性ある都市に成長して行くものと考えられます。